
K - O N ! ～ーリットルの涙～

紅茶花伝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K・ON！〜リットルの涙〜

【Nコード】

N3217P

【作者名】

紅茶花伝

【あらすじ】

「私、死んじゃうの？もうみんなとギター弾けなくなっちゃうの……？」
だけど、私はまだ死ねない。

どうも紅茶花伝です！新しい小説を書きたくなり書きました。ふわふわ日和のような恋愛を入れずにシリアスで行こうと思ってたいま

す。

第一話 発覚（前書き）

新しい小説です！
では本編をどうぞ。

第一話 発覚

〈病室〉

唯「ねえ、憂。」

唯「私あとのくらい生きられるかな…?」

憂「あはは、お姉ちゃん、冗談言わないの。」

唯「どもすいません!」

冷静を装ったけど私は知っています。お姉ちゃんはもう長くはないことを…。

唯「いつごろ退院出来るかなあ?」

憂「先生が週末には退院できるって。良かったねお姉ちゃん!」

唯「そっかあ、早くみんなと演奏したいなあ。ギターが恋しいよ…。」

〈一週間前〉

平沢母「脊椎小脳変性症…?」

平沢父「先生、それは一体どういう病気何ですか?」

お父さんが先生に聞きかえました。ここにお姉ちゃんはいません。

こんなことをまだお姉ちゃんに聞かせる訳にはいきませんでした。

「落ち着いて聞いてください。まず最初の症状はよく転ぶようになります…」

そこから先生は延々と話始めました。わかったことは…

歩行障害

足が震え最初は頻繁に転ぶようになる。最終的には歩けなくなってしまう。

四肢失調

手足が思うように動かない。箸が上手く使えなくなったり手が震え文字が上手く書けなくなったりする。最悪、物が一切握れなくなる。

構音障害

ろれつがまわらなくなる。一言一言が不明瞭になり上手く話せなくなる。最悪、失語する。

姿勢反射

急に倒れたり傾いたりする。

他にも尿失禁や起立性低血圧（起きると目眩がする）、筋固縮（筋肉が固くなったりする事）などがあげられる。

平沢母「唯は、唯は治るんですね？」

「残念ですが…。現在医療では回復はあり得ません。」

憂「じゃあお姉ちゃんは…？」

「個人差がある病気なのではつきりは言えませんがもって三年でしよう…。」

憂「そんな…。」

「とりあえず入院させましょう。まだ症状は初期段階なので今週末には退院できます。」

先生の話が終わり私とお母さん、お父さんの三人は家に帰ることにになりました。私は自分の部屋で泣くことしか出来ませんでした。

〈三日前〉

唯「憂…。凄い頭がクラクラするよお。」

憂「お姉ちゃん、大丈夫？」

ことの発端は朝にあつたただの目眩でした。

憂「うん。大丈夫かな…？今日お休みだし病院に行こっか？」

唯「え…。嫌だよお…。」

憂「駄目だよ！お母さんもいるし病院行こ。」

唯「はぁーい。」

最初はお姉ちゃんが単なる貧血かと思っていました。ただの貧血だったらどんなによかったか…。そう思うことになりました…。

〈続く〉

第二話 心配（前書き）

早々に第二話を投稿します。ではどうぞ。

第二話 心配

（部室）

憂「こんにちは。」

律「あ、憂ちゃん。どしたの？」

憂「少し皆さんにお話があつて…。皆さんが来るまで少し待たせて下さい。」

待つこと十分。軽音部全員が集まった。

紬「どうしたの憂ちゃん。唯ちゃんは大丈夫なの？」

憂「そのこと何ですが…。」

そこから憂は自分の姉である唯の病気について話始めた。涙を堪えながら。

紬「憂ちゃん…。じよ、冗談よね？」

梓「唯先輩がそんな病気だなんて…。」

漣「そうだよな、あはは、憂ちゃん、あまりそついった冗談はよしなほうが…」

憂「わ、私は今日冗談を言いにくここに来たわけではありません…。」

憂の目は真剣だった。そこでみんなはこれが冗談ではないことを察した。

律「あの、唯は知ってるのか？」

憂「お姉ちゃんにはまだ言っていません。症状があまり出ていない今言ってもお姉ちゃんの為にならないと思ったので…。」

律「そうか…。」

ちからなく律が答える。 漣は俯いたままで梓とムギは泣いていた。

漣「憂ちゃん、もしかしてもう唯に会えないってことじゃないよね？」

俯いていた漣が口を開く。

憂「まだはつきりとした症状が出ているわけではないのでとりあえず学校はまた来週から来ることになっています。」

漣「わかった…。」

憂「お話はそれだけです。今日お姉ちゃんが退院することになっているので失礼します。」

そういつて憂は音楽室を出ていった。

律「唯…、そんなに重い病気だったんだな…。」

梓「ひつく…、唯先輩が、唯先輩が…。」

紬「唯ちゃん…。」

漣「泣くな、ムギ、梓。」

梓「漣先輩は悲しくないんですか！？唯先輩が死んじゃうかもしれないんですよ！」

漣「私だって悲しい！悲しくないわけないだろ！だけど私たちの悲しい顔を唯に見せる訳にはいかないだろ！」

梓「すいません…。漣先輩…。」

漣「いや、わかればいいんだ…。こっちこそ怒鳴ってごめん…。」

紬「そうね…。泣いてる場合じゃないわよね。私たちが唯ちゃんに出来ることを考えないとね。」

律「…。練習しよう。」

漣「律…。」

律「一つでも多く唯の思い出をつくるためにさ。」

漣「そうだな…。私たちが出来ることをしよう。」

紬「ええ！」

梓「わかりました…。頑張りましょう皆さん！」

律「よし、いくぞ。ワン！ツー！スリー！フォー！」

みんな力が入らないのだろう。それはぎこちない演奏だった。しみんな一生懸命だった。

〈病院〉

唯「憂〜！」

憂「お姉ちゃん！」

唯「憂〜。寂しかったよお〜。」

憂「よしよし。じゃあ帰ろっか。」

唯「うん！今日のご飯はなにかなあ？」

憂「今日はお姉ちゃんが帰ってくるからハンバーグにしたよ！」

唯「おー。いいすなあ。」

仲良がいい二人。そして二人が手を繋ごうとした瞬間…。

唯「痛っ…。」

唯が転んだ。

憂「大丈夫お姉ちゃん！？」

唯「えへへ、つまづいちゃった。大丈夫だよ。」

憂「うん…。」

転んぶ。ただそれだけのこと。これまでの唯ならただのドジで済まされただろう。

（嫌な予感がする…。）

小さなことなのに憂は不安が拭えなかった。

） 続く ）

第三話 変わらないはずの日常（前書き）

こんばんは紅茶花伝です。三名の方にお気に入り登録をして頂きました。本当にありがとうございます。

第三話 変わらないはずの日常

（学校）

唯「みんな、おはよう。」

律「唯！久しぶりだな！」

紬「唯ちゃん、もう大丈夫なの？」

唯「うん！大丈夫だよ！入院生活とっても暇だったよ。」

律「あはは、だろうな。唯に入院はきつすぎるだろうね。」

唯「うわ、りっちゃん酷い！」

（唯、元気そうだな…。とりあえずは大丈夫じゃないのか？）

律は心の中でそう思う。

律「今日は登校一緒じゃなかったけどどうしたんだ？」

唯「お父さんに車で送って貰ったんだ。楽チン楽チン。」

律「ずるっ！」

唯「ふふん。羨ましいかい、りっちゃん？」

律「やっぱとくに…。」

唯「ええ！？そんなあゝ。」

紬「あら、そろそろさわ子先生いらっしやるわね。唯ちゃん、さわ子先生に会うの久し振りじゃない？」

唯「そうだね！じゃ、私そろそろ席に戻るね。」

その時…

ガタン

唯がまた転ぶ。

律「唯！？大丈夫か！？」

紬「唯ちゃん！？大丈夫！？」

唯「大丈夫だよ二人とも。少し転んだだけだから。でも最近よく転ぶんだよね。やっぱり私ってドジだね。」

唯は笑みを浮かべて答える。しかし律とムギの不安は拭えない。

唯「あ、さわちゃん来た。じゃ、またね。」

そついうと唯は席に戻っていった。

律「なあムギ…。」

紬「なに、りっちゃん…？」

律「このこと一応憂ちゃんに知らせたほうがいいかな？」

二人は憂から唯の病氣のことを聞き知っていた。そして二人とも家に帰ってこの病氣のことを調べていた。だから知っていた。もしかしたらさっきの唯の病氣の初期症状かもしれないと言うことを。

紬「ええ、そうね…。」

律「じゃあ…、また後で…。」

紬「ええ。」

「はい。ホームルームを初めます。」

今日もまた学校生活が始まる。いつもと変わらないだろう学校生活が…。

〈部室〉

唯「やつほー。」

梓「唯先輩！もう大丈夫なんですか！？」

唯「うん、なんとかね。それよりお茶お茶。」

梓「練習しますよ！」

唯「えー。あずにゃんのいけずー。久しぶりのムギちゃんのケーキなのー。」

漣「じゃあ食べたら練習！梓もそれでいいか？」

梓「仕方ないですね…。あ、ムギ先輩、私ミルクティーをお願いします。」

紬「はぁーい。」

~~~~~

唯「ふうー。落ち着きますなあ…。」

梓「そろそろ練習しませんか…。」

漣「だな。ほら、律、唯。」

唯「うん！ギー太弾くのも久しぶりだしね！」

律「んじゃいくぞ。」

唯（あれ？少し手が震えてる？）

律「ん？唯どうした？」

唯「いや、少し手が震えて。もう大丈夫だよ。」

全員が目を見張る。

紬「唯ちゃん、本当に大丈夫なの？」

漣「無理はしないほうが…」

唯「大丈夫だよ！多分久しぶりにギター太持ったからだよ！」

漣「そ、そうか。」

唯「みんな心配性だなー。早く練習しよう！」

漣「ああ、そうだな。律。」

唯「わかった。よしいくよ。」

いつも道理の部活風景。しかしこの時も唯の体は蝕まれていた。

（続く）

### 第三話 変わらないはずの日常（後書き）

感想お待ちしております。

## 第四話 告白（前書き）

夜遅くに更新します。

## 第四話 告白

唯が退院してから二週間が過ぎた。

く唯の家く

唯「憂ー。ただいまー。」

憂「お帰りお姉ちゃん。」

唯「ねえ憂？カットバンある？」

憂「お、お姉ちゃん！？どうしたのその足の怪我！？ぼろぼろじゃない！」

唯「うん、最近よく転んじゃうんだよね…。」

憂（まさか…。）

憂「お姉ちゃん！病院に行こう！」

唯「えー。大丈夫だよー。」

憂「お願い。病院に行こう。」

唯「もう、仕方ないなー。」

く病院く

お姉ちゃんを病院に連れて来たのは悪い予感が拭えなかったからです。お母さんとお父さんは電話をしたらすぐに駆けつけてくれました。

「平沢唯さん。向こうに看護婦さんがいらっしやるのでそちらで手当てをして頂きますか？」

唯「あ、はい。わかりました。」

「御家族の方はこちらへ。」

~~~~~

「誠に言いくいのですが平沢唯さんの病気の進行は思ったより早いです。これ以上唯さんに隠し通すのは無理だと思います。」

平沢母「そんな…。」

平沢父「…。わかりました。」

憂「お父さん…。」

平沢父「唯に知らせよう…。」

平沢母「ええ…。」

平沢父「先生、唯を呼んでください。」

五分ぐらいしてお姉ちゃんはやって来ました。

唯「お父さん、お母さん、どうしてここにいるの？仕事は？」

平沢父「唯、今から話すことは全部本当のことだ…。唯には凄く苦しいことだが心して聞いて欲しい…。」

唯「お父さん、どうしたの？」

平沢父「唯、お前はいま凄く思い病氣にかかっている…。」

唯「え？」

平沢父「脊椎小脳変性症という病氣だ。」

唯「う、嘘だよな？あはは、さすがにお父さんも冗談がキツイよ。」

平沢父「唯…。認めたくないのはわかる。だけど本当のことなんだ。」

唯「じゃあ、私どうなっちゃうの？」

平沢父「今から先生に説明して貰うからよく聞いておきなさい。」

先生の話しは三十分にも及びました。最初、お姉ちゃん信じられないという顔をしていましたが先生の話を聞くうちに自分のおかれている状況に気付き始めたようでした…。

唯「じゃあ、最近よく転ぶようになったのは病氣のせいなんですね？」

「はい。」

唯「わ、私は治るんですね…?」

「今の医療では治療方が確立されていません。経口薬やリハビリで進行をある程度抑えることしか出来ないのです…。」

唯「そんな…。」

「すみません…。」

唯「じゃあ、私死んじゃうんですか…?死にたくない、死にたくない、死にたくないよお…。」

お姉ちゃんそう呟きながら泣いていました。私も、お母さんもお父さんも…。

〈唯の部屋〉

とりあえず私は家に帰って来ました。病院で二ヶ月分の薬を貰い、手足に付けるリハビリ用の重りを付けて貰って…。

唯「ギー太…。」

私は愛用のギターを手にとって弾いてみます。アンペがないから頼りない音しかでないけれど、ギー太はいつもと変わらない音を出してくれました。

憂「お姉ちゃん?入っていい?」

唯「うん…。」

憂「ねえ、お姉ちゃん…。病気の隠したこと怒ってる…？」

唯「怒ってないよ。憂は私のことを考えて黙ってくれてたんでしょ？」

憂「お姉ちゃん、ごめんなさい…。」

唯「…。ねえ憂…？」

憂「なに、お姉ちゃん？」

唯「私、ギター弾けなくなっちゃうのかな…？軽音部のみんなとは一緒にいられなくなっちゃうのかな？」

憂「お姉ちゃん…。」

唯「ごめんね、憂。だけど私怖いんだ…。歩けなくなったり、喋れなくなったり、ご飯食べれなくなったり、物も持てなくなったり…。そしたらみんなに迷惑かけちゃうんじゃないかって…。それに軽音部のみんなはギターの弾けなくなったら私を必要としてくれるのかなって…。」

憂「お姉ちゃん、私はいつまでもお姉ちゃんの妹だし、お姉ちゃんはいつまでも私の大切な只一人のお姉ちゃんだよ。」

唯「憂…。」

憂「きつとみんなそう思ってる。律さんも澪さんも紬さんも梓ちゃんも和ちゃんもみんなそう思ってる。」

唯「うん……。ありがとう、憂。」

そのあと私たち二人はまた泣きました。姉妹で抱き合って大泣きしました。だけどさっきのように自分が死んでしまうことの恐怖からくる涙ではなかったと思います。本当に自分のことを思ってくれている妹がいる。そのことがわかったことからの嬉し泣きでした。

唯（本当にありがとう。）

私は本当に憂がいとおしく感じました。別れたくありませんでした。

く続くく

第四話 告白（後書き）

感想等をお待ちしております。

第五話 絆（前書き）

投稿します。ではどうぞ。

第五話 絆

（部室）

今日、私は学校を休みました。だけどこうして部室に来たのは軽音部のみんなに話があったからでした。

唯「こんにちは。」

漣「唯？お前…。学校来るなら最初から来いよ…。」

梓「そうですよ先輩。」

律「ブーブー。私も休みたかったよー。」

紬「まあまあ漣ちゃん、梓ちゃん。唯ちゃんはミルクティーでいいかしら？」

唯「うん…。ありがとうムギちゃん。」

律「で、唯。ギターは？」

唯「今日はね…。練習をしに来たわけじゃないんだ…。」

（まさか…。）

唯「あの、私ね、病気なんだ…。」

律「知ってる。」

少し驚きましたが多分憂が話してくれていたのでしょうか。

唯「じゃあ話が早いかな…?」

そういった私は退部届けをりっちゃんに差し出します。

律「唯、これなに?」

りっちゃんは思った通りのことを聞いて来てくれました。

唯「退部届けだよ…。」

梓「唯先輩…。そんな…。」

漣「唯!? どうして!?!」

紬「唯ちゃん…。」

りっちゃん以外の三人は驚いた声を出しました。りっちゃんは少し考えたような顔をして黙っていました。

梓「唯先輩! 嫌ですよ! 私は唯先輩のギターに憧れてこの軽音部に入ったのに!」

唯「ごめんね、あずにゃん。でももう私ギター出来なくなっちゃうかもしれないんだ。」

漣「でもまだギターが弾けない訳じゃないんだろ!?!」

紬「そうよ、唯ちゃん!」

唯「でも…。やっぱりみんなに迷惑かけるから…。」

律「わかった。確かにこの退部届け受け取ったよ。」

紬「りっちゃん!？」

漣「律!？」

梓「律先輩!？」

しかし次の瞬間りっちゃんは封筒ごと私の退部届けを破り捨てました。

律「だけど私はごめんだね。」

漣「律…。」

律「みんなあれの準備。梓も弾けるようになったよね?。」

梓「はい!。」

漣「わかった。」

紬「ええ。」

唯「え?何?。」

みんなはそれぞれ楽器を持ちいつものポジションにつきます。

律「いくよ。ワン、ツー、スリー、フォー。」

唯（あ、この曲はたしか…）

そう、その曲は「翼をください」でした。私が軽音部に入るきっかけとなった曲です。初めて聞いた時はみんなまだ下手くそだったけど私の心にとっても響いた曲…。

唯「みんな…。」

律「覚えているか唯？お前は最初来たとき私たちのこの演奏を下手くそっていったの？」

唯「うん…。」

律「みんなだいぶ上手くなっただろ？去年弾いたときはギターがいなかったけどな。」

漣「だったな…。だけど、唯がいたからここまで私たちはこれなんだ。」

紬「唯ちゃんとは私たちといた時間は楽しくなかった？」

唯「みんな…。楽しかった…。よ。だけど、ギターが出来なくなった私はみんなのお荷物になるんじゃないかって…。私、前の文化祭もギター忘れたり他にもいろいろ迷惑かけて…。」

律「唯は馬鹿だな。私たちは仲間だろ？」

梓「そうですよ！五人揃って初めて放課後ティータイムなんですか

ら！」

紬「だから唯ちゃん。そんなに自分を責めないで。」

律「唯。唯の病氣知ってたの隠したりしてごめん。」

漣「私も謝る。」

紬「ごめんなさい…。」

梓「申し訳ありませんでした…。」

律「だけど唯が病氣だからっていつても唯は軽音部の部員で私たちの仲間だ。」

唯「りつちゃん…。」

律「それでも辞めるなら私はとめない。でもその時は私も辞める。」

漣「みんなそのつまりだ。」

梓「はい。」

紬「ええ。」

唯「みんな…。やっぱり私、ギターやりたい…。みんなと一緒にまだまだ軽音やりたいよお…。」

涙が止まらなかったです。憂の言う通り、軽音部のみんなはギターの弾ける私だけでなく私自身を必要としてくれていたから。

律「よし！真面目な話はこれで終わり！アイス食べに行こうぜ！部長の私が奢ってあげよう！」

唯「えへへ、りっちゃん太っ腹。」

紬「ホントに！？」

漣「どうしたんだ律？」

梓「いいですね！」

りっちゃんも泣いていたしあずにゃんも漣ちゃんもムギちゃんも泣いていたのを見たけど最後はみんな笑顔でした。

律「ほら唯！行くぞ！」

唯「うん！」

私は涙を拭いて歩き出そうと思います。病気のせいで少し歩きにくくなったけど私はまだ歩けるから。大丈夫。私はまだ死なない。

～続く～

第六話 お茶と練習（前書き）

こんばんは紅茶花伝です。眠い目を擦っての更新です。最近ふわふわ日和の次ネタが思い付きません（笑）
では短いですが本編をどうぞ。

第六話 お茶と練習

唯の病気が発覚してから三ヶ月がたった十二月のある日のこと。

く桜ヶ丘軽音部く

律（ライブまであと一週間を切ったな…。）

十二月の最後に商店街の一角にある小さなライブハウス。そこで開かれるライブ桜ヶ丘軽音部は参加する事にした。いつもなら漣や梓あたりが反対しただろうが今回は誰一人として反対しなかった。

唯の思い出作り

それが彼女らの暗黙の了解だったから…。

唯「あずにゃん！学校以外でライブするのドキドキするね！」

梓「はい！だから練習しましょう！」

唯「えー、もうちつとだけお茶したいよぉ。」

梓「駄目です！早く練習します！」

唯「あ〜ん。あずにゃんのいけずうー。」

漣「唯！梓の言う通りだそろそろ練習するぞ。」

唯「えー、ケーキ…。」

紬「唯ちゃん、練習終わったらケーキにしましょうね。」

唯「はい。」

律「んじゃ、みんな配置ついて。」

全員が配置に着く。

律「じゃあ…、ワン、ツー、スリー！」

唯「君を見てるといつもハートDOKIDOKI…。」

一時間後。練習が終わる。

律「うん、完璧だな。」

漣「もう少し律はリズムキープした方がいいぞ。」

紬「私もそれ感じたわ。」

律「そうか？じゃあもう少し押さえてみるよ。」

漣「唯と梓はは大丈夫そうだな…。」

唯「はい。唯先輩もなかなか上手になってます。」

律「お、梓も言うようになったな！このこの！」

梓「きゃー！」

何だかんだで楽しんでいる五人だった。

律「んじゃ、そろそろ帰るぞ!」

唯「あ、肉まん食べたい…。」

律「まだ食うのかよ!？」

紬「唯ちゃん…、さすがに太るわよ…ね?」

唯「私いくら食べても太らない体質なんだ。」

漣& a m p ; 紬「何だつて!？」

漣「わ、私は冬はお肉ついちゃうのに…。」

紬「漣ちゃん…。私もよ…。」

漣「ムギー!」

紬「漣ちゃん!」ダキッ

律「あー、唯。とりあえず二人に謝っておけ。」

唯「ご、ごめんね!」

梓「早く帰りませんか?」

唯「そ、そうだね!みんな行こう!」

そういったあとにゆっくり歩き出す唯。他の四人は唯に合わせて歩く。これが唯の病気が発覚してから習慣みたいなものだった。

唯「みんなライブ頑張ろうね！」

律「そうだな！」

澪「ああ！」

紬「ええ！」

梓「やってやります！」

ライブを成功させる。肉まんを頬張りながらそう誓う五人だった。

く続くく

第六話 お茶と練習（後書き）

感想等お待ちしております。

第七話 ライフ（前書き）

こんばんは紅茶花伝です。なんとか書き終わりましたが次の更新は来月かもしれません。申し訳ありません。

第七話 ライブ

こんにちは。平沢唯です。もうすぐ冬休み。今日はみんなでライブハウスでの演奏の申し込みに行きました。

くライブハウスく

律「あ、あの。すみません！」

「はい？どうしたの貴方達？」

律「えっと…。ここで開かれるラ、ライブの演奏の申し込みをしたいんですが！」

「はい、どうぞ。この紙に連絡先とかメンバーとかバンド名とかを書いてね。」

律「は、はい。」

唯「ねえ、あずにゃん。ここに書かれているのってさ今回のライブにでる人達だよね？」

梓「たしか…。そうですね。」

唯「私たちの放課後ティータイムってなんかあれじゃない…かな…？」

「うっ…。」

漣「唯、仕方ないだろ…。」

律「しかし漣。たしかにあれだよな…。」

絀「でも私は放課後ティータイムって名前が好きよ!」

漣「そうだな。ムギの言う通りだ。」

唯「だねムギちゃん。みんな変なこと言ってごめん…。」

律「唯、気にすんな。」

そんなこんなで記入用紙を書き終えた私たちはそれを提出しに行きました。

律「あの一。書き終わったんですが。」

「はい。放課後ティータイム?可愛い名前ね。」

律「あ、ありがとうございます!」

「はい、これステッカー。本番はこれを貼ってきてね。」

律「あ、どうも。」

唯「早速貼ろうよ!」

梓「唯先輩…。なんで太ももに貼ろうとするんですか?」

唯「いやあー。セクシーかなーって。」

漣「それに今貼っても意味ないだろ…。」

唯「あ、そっか。」

紬「あらあら、唯ちゃんはあわてんぼうね。」

みんないつもと変わらずに私に突っ込みをいれます。私の体に異変が出てからも変わらないことの一つでした。

「ほら、用事も済んだし帰るぞ。」

初めてのライブ。私達はみんな心踊らせていました。

く唯の家く

唯「憂く。ただいまく。」

憂「お帰りなさい、お姉ちゃん。」

唯「おっとつと。」

いつものようによろける私。玄関のように低い段でも最近うまく登れないようになってきてしまいました。でも手すりがあればなんとか登れるしみんなが肩を貸してくれるのでこのときはあまり気にしていませんでした。

憂「大丈夫お姉ちゃん!？」

唯「うん。肩借りるね。」

憂「うん。あ、ご飯出来てるよ。今日はハンバーグだよ!」

唯「わーい!憂早く早く!」

憂「待ってお姉ちゃん。そんなに早く歩くと…」

ガタン!

唯「痛ッ!」

憂「大丈夫お姉ちゃん!?!」

唯「大丈夫大丈夫。日常茶飯事だよ。」

その時一瞬ですが憂が私をみて泣きそうな顔をしたのを見逃しませんでした。日常茶飯事と言う言葉に反応したのでしょうか?

唯「ねえ、憂。どうしてそんな悲しそう顔をするの?」

憂「え?あっあっ!?!ごめんなさい!」

唯「ほら、憂、泣かないで。憂は笑ってるほうが可愛いよ。」

憂「うん…。」

唯「ほら!早くご飯食べよう!」

憂「そ、そうだねお姉ちゃん!」

く夕食く

唯「やっぱり、憂のハンバーグ美味しいね。」

最近は筋トレとりハビリ、薬のおかげでだいぶお箸も持てるようになりました。おかげで憂のご飯も美味しいです。

憂「ありがとう。」

唯「あ、そうだ憂。はいこれ。」

憂「ん？お姉ちゃん、なにこれ？」

唯「秘密にしてたけどね。ライブハウスでライブすることになったんだよ！」

憂「ほんとに！？お姉ちゃん絶対来るよ！」

唯「ありがとう憂。あとは和ちゃんに渡さないかね。」

（お姉ちゃんのライブかあ。楽しみだなあ。）

そして数日経ちついに私たちの初めてのライブがやってきました。

くライブ当日く

和「しかし唯がライブハウスでライブするなんてねえ。」

憂「そうですね。」

純「ほら、憂。皆さん来たよ。」

唯「ヤッホー憂！和ちゃんに純ちゃんも来てくれてありがとう。」

和「あら唯、大丈夫なの？」

唯「大丈夫だよ！和ちゃんは心配性だね。」

和「その様子なら大丈夫そうね。」

憂「お姉ちゃん達は何番目なの？」

唯「最後だよ！手振るからね！」

和「はいはい。じゃあ頑張ってください。」

唯「うん！行ってきます！」

そういつてお姉ちゃん達は楽屋に行ってしまった。私たちもライブハウスに入りました。暇な一時間半以上が経ちついにお姉ちゃんの出番が来ました。

~~~~~

律「おし！行くぞ！」

澪「ああ！」

紬「ええ！」

梓「やってやります！」

唯「うん！」

その時、私の足に少し違和感が走りました。

唯（大丈夫だよね…？）

紬「どうしたの唯ちゃん？」

唯「ほえ？な、なんでもないよ！さっき飲んだムギちゃんの紅茶美味しかった。これで私頑張れそうだよ！」

紬「うふふ。喜んでもらえて良かったわ。終わったら打ち上げで美味しいケーキも用意しておくわね。」

唯「楽しみだよ！」

それでは放課後ティータイムの皆さんどうぞ！！

律「お、始まったな！行くぞみんな！」

「「おー！！」」

こうしてついにはじまりました。

唯「どうも！放課後ティータイムです！この日を楽しみにして毎日練習してきました！」

そしてMCを言い終わり…

唯「では聞いてください！私の恋はホツチキス！」

唯& a m p・澪「なんでなんだろう。気になる君への、この思い便箋にね、書いてみるよ。」

一曲目、二曲目、三曲目。順調に進んでいました。

唯「もう最後になりました！最後の曲はふわふわ時間です！この曲は私たちが最初に作った曲でした。だから精一杯演奏したいと思います！」

コクン

律「ワン、ツー、スリー。」

唯「君を見てるといつもハー……」

そのときでした。私は急に立てなくなりついに倒れてしまいました。

唯（あれ？）

律「唯！？」

唯「どうした唯！？」

紬「唯ちゃん！？」

梓「先輩！？」

憂「お姉ちゃん！」

和「唯！」

純「え？何？唯先輩どうしたの？」

みんながあわてて私に近づいてきました。憂と和ちゃんも前にいた観客の人を押し退けてきます。

律「すいません！救急車を！救急車を呼んでください！」

紬「唯ちゃん大丈夫！？」

梓「唯先輩大丈夫ですか！？」

憂「お姉ちゃん大丈夫！？」

みんな慌ててます。観客の皆さんも騒ぎでした。

唯「足が、足が動かないよ…。みんなごめんね…。」

梓「なんで謝るんですか！」

律「そうだよ唯！」

唯「日頃の行いが悪かったんだよ…。お菓子ばっか食べて練習しないであずにゃんや澪ちゃんに怒られてばっかだったし…。」

梓「最近の唯先輩は頑張っていましたよ！一生懸命練習していました！だからそんなこと…、そんなこと言わないでください！」

漣「そうだ唯！お前は頑張ってたよ！」

唯「えへへ、ありがとう。ねえ、憂、和ちゃん。私の演奏どうだったかな？」

「良かったわ。頑張ったわね、唯……。とっても良かった……。」

憂「お姉ちゃん、最高だったよ。」

唯（あーあ……。こんな形でライブ終わっちゃうのかあ……。）

しばらくして救急車がやってきました。みんなを残して私は救急車にのせられました。

唯（みんな、ごめんね……。ごめんね……。）

そこからはあまり意識がありません。こうして私の最後のライブは終わりました。そして私はこの日“足”を失いました。

## 第八話 ギー太（前書き）

こんばんはみなさん。紅茶花伝です。

テストが終わったので投稿しますよ。

実をいうとふわふわ日和をしばらくお休みして先にこちらを完結させたく思っています。

予定では来月までには完結させたいです。

忙しい宣言したのに出来るか？

では本編をどうぞ

## 第八話 ギー太

ライブが終わったその日の夜のこと。軽音部のみなさんと和ちゃんはずでに帰ってしまいましたが私には病院の先生からお姉ちゃんのことを聞かなければなりませんでした。

憂「あの…、お姉ちゃんは…？」

「進行がかなり早いです。恐らくはもうあまり歩くことは出来ないでしょう…。」

憂「そんな…。」

お姉ちゃんは今は病室で眠っています。お母さんもお父さんも出張でいない今先生の話は私が一人で聞かなければいけません。それがとてもつらいです…。

「これから唯さんにいろいろな症状が出てくるでしょう…。その事は覚悟しておいてください。」

憂「はい…。」

どうしてお姉ちゃんなのでしょう？いつも優しく抱きしめてくれて暖かくて、大切な大切なお姉ちゃんなのに…。

（病室）

お姉ちゃんの寝息が聞こえます。いつも聞いているお姉ちゃんの寝息です。なのにこんなに悲しくなるのは何でだろう…？

憂「お姉ちゃん？」

返事はありません。

憂「お姉ちゃん…。嫌だよ…。死んじや嫌だよ…。」

思えばお姉ちゃんが初めて自分自身の病氣に向き合い姉妹で泣いたあの日以降には悲しそうなお姉ちゃんを一回も見ませんでした。いくら歩きにくそうにしても、リハビリがきつくてもお姉ちゃんはいつも笑っていました。

憂「お姉ちゃん…。お姉ちゃん…。」

そして泣きつかれた私はいつの間にかお姉ちゃんの横で眠っていました。

~~~~~

憂「うん…。」

唯「おはよう、憂。」

憂「お姉ちゃん…。」

昨日の夜、泣き疲れ眠っていた私の頭をもう動くことない自分の膝の上にのせてベッドの上のお姉ちゃんはいつものようなふわふわした笑顔を見せていました。

唯「よく眠れた？」

そういったお姉ちゃんは優しく私の頭を撫でます。自分の子供の頭を撫でるように……。いつもはほんわかった少し頼りないお姉ちゃんだけどやっぱりお姉ちゃんなんだと思います。

唯「昨日はごめんね。私、憂にカッコ悪いとこ見せちゃったね。」

憂「ううん。一生懸命ギターをするお姉ちゃん、とってもカッコ良かったよ。」

唯「ありがとう。ねえ、憂。今ギターはここにある？」

憂「うん。あるよ。」

救急車で一緒に付き添った私のあとに律さんたちは急いで病院に来てくれました。その時に律さんたちはお姉ちゃんの荷物も持ってきてくださいました。

唯「ギター。昨日はごめんね。私、ギターを床に落としちゃったね……。痛かったよね……。」

ギター太に謝るお姉ちゃん。そして……

唯「ねえ憂。ギターを弾いてみない？」

憂「え？」

唯「ほら。」

憂「お姉ちゃん!？」

半場無理矢理にギターを持たされた私。前に元気だったお姉ちゃんと練習したので少しならわかります。

唯「うん。そうやってもって…。なかなか様になってるよお。確か憂ははCコードが出来たから次はFコードだったかな?」

私の手をコードの場所に持っていくお姉ちゃん。暖かくて柔らかい手…。昔から変わらない優しい手……。

唯「うん。憂は上手だね。すぐに私より上手になるよ。」

だけど一つ疑問がありました。

憂「ねえお姉ちゃん。どうして今、急に私にギターを教えるの?」

唯「それはね、憂にギターを貰って欲しいからかな……?」

憂「えっ?」

そう言われた瞬間はなにを言ってるかわかりませんでした。しかしそれは多分こういうことを意味するのでしょう……。

お姉ちゃんがギターをやめてしまう…。

憂「お姉ちゃん、もしかしてギターやめちゃうの?」

唯「うん。そのつもりだよ。」

そのことを聞いて私はこらえられなかった。

憂「どうしてっ…!？」

唯「もう歩けなくなっちゃったしね…。それにね、憂。私はもうすぐギターも持てなくなっちゃうと思うの。」

確かにお姉ちゃんの言う通りです。実際に先生もそうおっしゃいました。それでも……。でも……。

憂「でもっ…。」

唯「うーい。お願い。ね？」

憂「…………。」

私はすぐには答えられませんでした。黙っているとお姉ちゃんが一人話始めました。

唯「ギー太はね、私が変わるきっかけを与えてくれた大事なギターなの。中学生のころの私は夢中になれることが何一つなくて、よく家でゴロゴロしてたよね。」

憂「うん。」

唯「それに弾いてあげないとギー太は拗ねちゃうし…。私は憂にかギー太をあげたくないから…。」

お姉ちゃんの決意。それはお姉ちゃんが一五歳のときに出会った大切な、本当に大切な「彼氏」のようなギターへの想いでした。

憂「お姉ちゃん…。わかったよ。」

唯「本当！？よかったあゝ。ありがとう憂。良かったねギー太ゝ。」

そういつてギー太触るお姉ちゃん。去年の四月からずっとお姉ちゃんはこのギターと一緒にでした。片時も離さなかった、それほどお姉ちゃんにとって大事なものの。それを妹の私にあげるのです。それはけして生半可な気持ちじゃないでしょう。その気持ちを私は踏みにじれませんでした。

唯「学校始まつたら一緒に軽音部に行こうね。きっとみんな喜ぶよ。」

憂「うんっ……。」

さつきから涙が止まりません。昨日あんなに泣いたはずなのに……。

唯「ほら、笑って、憂。軽音部は楽しいよ！みんな優しいし、あ、ムギちゃんのケーキも楽しみだなあー。」

明るく話すお姉ちゃん。

唯「そうだね…。そうだよねお姉ちゃん！」

お姉ちゃんは自分が歩けないことをもうわかってるのでしょうか。それでもお姉ちゃんは優しく笑っていました。だから私も笑おうと決めました。大好きなお姉ちゃんのために、そして私のために……。

）
続
く
）

第八話 ギー太（後書き）

ぐだぐだでしたね（笑）

感想等を待ち望んでおります（笑）

では

第九話 冬の日（前書き）

どうもこんにちわ。紅茶花伝です。

今回は更新早いです。フルスピードで書いているのでしばらくは更新できると思います。

この調子で完結までいきたいですね！

では本編をどうぞ！

第九話 冬の日

私が歩けなくなつて一週間がたちました。病院の検査が終わり私はいったん家に帰れることになりました。

唯「うゝいゝ！こつちこつち！」

憂「お姉ちゃんゝ！」

唯「えへへへ。憂ゝ、久しぶりゝ。」

憂「お姉ちゃん…。昨日も会つたよ…。」

唯「そうだっけ？」

憂「そうだよー。」

唯「ごめんごめん。」

他愛もない会話。一週間ぶりのの外の世界に私は少し興奮していたのだと思います。私は憂と二人で先生と看護婦さんに挨拶を済ませ家に帰ることにしました。

憂「じゃあ行こっか。」

唯「うん。」

タクシーを呼ぶことも出来たけど私のわがままで二人で歩くことになりました。と言っても私は車椅子に乗ってるんだけど。

唯「寒いねー、憂。」

憂「そうだねー。」

唯「ごめんね、歩きたいなんてわがまま言つて。」

憂「ううん。気にしてないよ。それよりお姉ちゃんは今日の晩御飯何がいい？」

唯「うーん。」

久しぶりの憂のご飯。本当のことをいうと病院のご飯はあまり美味しくなかったから何が食べたいか迷います。

唯「ハンバーグ！ハンバーグが食べたいよ！」

憂「了解！あ、さつき律さんから電話があつたよ。」

唯「りつちゃんから？」

憂「最近お姉ちゃんにあつてなかったし今日退院だから後で家にいらつしやるつて。」

唯「そっか。」

私は記憶を辿つてみることにしました。確か最後にあつたのは三日前だった気がします……。少し考えていると、

憂「お姉ちゃん、そろそろ着くよ。」

唯「あれ？もう着いた？意外と早かったね。」

憂「お姉ちゃんボーっとしてたからだよ。」

唯「あ、憂しどい！」

他愛もないことをしているうちに私達の家が見えてきました。

「平沢家」

憂「はい、着いたよ。」

憂が車椅子をひいて私をリビングに連れていってくれます。

唯「床汚れないかなあ？」

憂「マットを引いたから大丈夫だよ。」

歩けないのでどうしても家の中でも車椅子生活になってしまいます。しかし家の玄関の前と入ってすぐのところにマットが新しく引いてありました。さすがは憂。準備が早いです。それによく見たら玄関の段差のところにも私が一人でも上りやすいように後付けのスロープがついています。

憂「じゃあお姉ちゃん、私今からご飯つくるね！」

唯「楽しみしてるよ！」

~~~~~

憂が準備をはじめてから十五分くらいがたちました。ふと玄関のチャイムがなります。

憂「はい。」

唯「あ、私が出るよ。」

憂「大丈夫、お姉ちゃん？」

唯「大丈夫だよ！はい今行きます！」

自分で車椅子を動かして玄関に向かってドアを開けたらそこにいたのはりっちゃんでした。

唯「いらつしやい。」

律「おつす、唯。退院おめでと。はい、これケーキ。」

唯「あ、ありがとう！寒いから入って入って。」

律「んじゃ、お邪魔します。」

~~~~~

唯「憂。りっちゃん来たよー！」

憂「あ、律さんこんにちわ！」

律「おつす、憂ちゃん。」

唯「あ、そうだ！りっちゃん今日ご飯食べていけない？」

律「え？悪くないか？あ、憂ちゃん、お茶ありがと。」

唯「大丈夫だよー。ねー、うーい？」

憂「うん！多めに作ったから一人分ぐらいは大丈夫だよ。」

唯「という訳だよりっちゃん！」

律「じゃあゴチになります。憂ちゃん、手間かけさせて悪いね。」

それから一時間あまりがたまた。女の子同士の会話は話題が尽きませんでした。今気になるバンド、ファッション雑誌のこと、新しく出来たらしいアイスクリームショップとか。他愛のない会話で時間が過ぎていくのがわかりました。それは気付かないうちに晩御飯の時間になっているぐらいでした。

憂「お姉ちゃんー！律さーん！ご飯出来ましたよー！」

唯「ご飯出来たって！行こうりっちゃん。」

律「おうっ！」

りっちゃんが気をきかせて車椅子をダイニングルームまで動かしてくれました。この行動をありがた迷惑だっと思う人もいるらしいけど車椅子を乗ってる人自身が動かすのは結構な腕の力を使うので私には少しキツイです。私にはりっちゃんの気づかいを十分ありがたく思いました。

律「お、ハンバーグじゃん！」

憂「お口に合うかどうか分からないですか…。」

唯「りっちゃん！憂のハンバーグは美味しいんだよ！」

律「んなこと前に食べたことあるからしつとるわい！」

唯「ほら！早く食べようよ！」

憂「じゃあ…」

「いただきます！」

久しぶりの憂のハンバーグはとても美味しく感じました。

律「旨いな…。憂ちゃん私の嫁に来ない？」

唯「駄目だ！りっちゃんに家の憂をやる訳にはいかん！」

律「お前は憂ちゃんのお父さんか！」

憂「でもそういうことなのでお断りします。」

律「ふ、振られた…。」

「アハハハハ！」

律「わ、笑うな！」

憂と二人で食べるご飯は一人で食べるご飯より二倍は美味しい。それに今日はりっちゃんも一緒だから三倍かな？そう考えているとふとりっちゃんに言わなければいけないことを思い出しました。

唯「ねえりっちゃん。」

律「ん？どした？」

唯「真面目な話があるんだけど…。」

そういつた瞬間りっちゃんの雰囲気はさっきの少しふざけた感じからすっかりとした部長としての感じになります。

律「軽音部のことか？」

唯「うん。」

律「まさかやめるなんて言わないよな？」

唯「ううん。憂をね、ギターとして軽音部に入れて欲しいんだ。」

少しびっくりした様子のりっちゃん。さすがに憂が入部したいというのは察しがつかなかったみたいです。

律「憂ちゃん、そうなのか？」

コクン

憂が小さく頷きました。

唯「あのねりっちゃん。私は近いうちにギターが持てなくなるの。」

律「ああ。わかってる。」

唯「じゃあ話が早いかな？まだ私がギターを弾けるうちに憂にギターを教えたくてね。それに軽音部にはあずにゃんもいるし憂は呑み込み早いからすぐに上達すると思うんだ。」

理由をりっちゃんに話します。りっちゃんは少し考えたあとに口を開きました。

律「二人が決めたことなんだな…？」

唯「うん。」

憂「はい。」

律「じゃあ私は何も言わない。みんなも憂ちゃんを歓迎してくれると思うよ。」

唯「ありがとうりっちゃん。」

律「うん。じゃあ憂ちゃん！改めてよろしく！」

憂「はい！」

そのあとはまた他愛のない会話で時間が過ぎていきました。

~~~~~

律「唯は明日学校くるんだっけ？」

唯「もちろん行くよ。」

律「そっか。寝坊するなよ！」

唯「しないよあ。」

律「んじゃあもう遅いから私はそろそろ帰るわ。じゃあ二人ともまた明日な！」

そのあと二人で玄関までりっちゃんを見送りに行きました。

唯「バイバーイ！」

憂「さようならー。」

~~~~~

りっちゃんが帰った後私は憂とお風呂に入りました。風呂に入るというのは歩けない私と手伝ってくれる憂にとってかなりの重労働でした。

唯「きもひよかったねえ〜憂〜。」

憂「うん！さっぱりしたね！」

唯「ごめんね。大変だったよね？」

憂「ううん。気にしないでお姉ちゃん。」

唯「ありがとうーいー。」

憂「どういたしまして。明日も早いしそろそろ寝よっか。」

唯「うん。そうだね。」

私は階段を上れないので今日から一階の客間で寝ることになりました。

憂「お姉ちゃん、おやすみなさい。」

唯「うん。あ、そうだ！憂も一緒に寝よう！」

憂「うーん。そうだね。ちょっと準備してくるよ！」

その夜。憂が一人寒い思いをしたのは言うまでもありません。

第九話 冬の日（後書き）

車椅子の生活を書くのってとても難しいですね……。一応、唯は全く歩けないと言っわけではなく、かろうじてよちよち歩きができるぐらいのイメージです。それでも生活に支障があるのは変わりませんが。感想等お待ちしております。

第十話 新しいHTT（前書き）

更新しますよー！早いペースだと自分では思っています。
では本編をどうぞ！

第十話 新しいH T T

憂「じゃお姉ちゃん、行こっか。」

唯「うん！」

「「行つてきます！」」

待ちに待った新学期。今日からまた学校が始まりました。

唯「寒いねー。」

憂「そうだね。」

二人で歩いていると（私は車椅子だったけど）後ろから声がしました。

梓「唯せんぱーい！憂ー！」

唯「あ、あずにゃん！おはよー！」

憂「おはよう梓ちゃん。」

梓「はあはあ。ゆ、唯先輩、お、おはようございます…。憂もおはよう…。」

唯「す、凄く息があがってるね…。」

梓「ギ、ギターが重くて…。」

むったんはギー太ほど重くはないけど小さいあずにゃんにはかなり重いんだろうなあ…。

唯「いやー、新学期早々やる気がしますなあ。」

梓「あ、当たり前です！今年は唯先輩ももつと練習頑張りますよ！」

憂「そのことなんだけどね梓ちゃん…。」

梓「ん？憂、どうしたの？」

唯「そうだね！あずにゃん、頑張ろうね！」

憂（お姉ちゃん！？）

少し無理矢理過ぎたかもしれないけど今はまだ話す時じゃない気がしました。憂には目で合図をしたら察してくれたみたいです。

唯「ねえ、憂？どうしたの？」

憂「ううん、何でもないよ！あ、あれ律さん達じゃない？」

唯「ほんとだ！りっちゃん！澪ちゃん！ムギちゃん！」

やつと、みんな揃ったかな……？

律「オッス！」

澪「おはようみんな。」

紬「唯ちゃん梓ちゃん、あ、憂ちゃんも！おはよう。」

律「じゃあみんな揃ったな！行くぞ！」

「「おー！」」

そのあと、憂とあずにゃんと澪ちゃんと別れてりっちゃんとムギちゃんと教室に向かいます。そしてホームルームでさわちゃん先生の話を聞いたあとに終業式がありました。たしか体育館の講堂で校長先生の長話を聴いて…、校歌を歌ったところまでは覚えてるけどそのあとは記憶にないなあ……。

紬「唯ちゃん？」

唯「ん…？」

律「おはよう。」

唯「あ、りっちゃん、ムギちゃん。」

律「お前…。ずっと寝てただろ？」

唯「えへへへ。バレちゃった？」

紬「あらあら。仕方ないわねえ。」

律「ほら、ホームルーム終わったら放課後だから頑張れ。」

唯「うん。部室久しぶりだねー。」

律「そうだな…。」

りっちゃんは少し考えた顔をしました。私も昨日りっちゃんに話したことを言わなければいけません。

紬「どうしたの唯ちゃん？なにか困ったことでもあった？」

唯「ほえ？ううん！何でもないよ！」

顔に出てたみたいです。ムギちゃんはポカポカしてるように見えて意外と鋭いから気を付けないと…。

紬「そう？困ったらなんでも言ってね。」

唯「うん。ありがとう、ムギちゃん。」

律「ほら、ついたぞ。」

教室に着いたらすぐにさわちゃんのお話があってその後すぐに解散になりました。

〈部室〉

唯「久しぶりの部室だあ。」

律「あー。ほんとだ。」

紬「いまお茶淹れるわね。」

すぐに運ばれてくる紅茶とお菓子。今日のムギちゃんのお菓子はチーズケーキです。ムギちゃんとりっちゃんの三人で話している間に、澪ちゃんとあずにゃんも部室にやって来ました。

唯「あずにゃん、憂は？」

梓「え？えーと、確か日直だった気が…。」

憂「失礼します。」

あずにゃんに聞いた直後に憂が入ってきて少しびっくりしました。

梓「あ、憂。どうしたの？」

あずにゃんが疑問に思うのも仕方ないことです。

律「あ、憂ちゃん。とりあえず座って。ムギ、お茶淹れてあげて。」

紬「はい。憂ちゃん。紅茶で良かったかしら？」

すぐに運ばれてくる紅茶とお菓子。憂が一息ついたときにりっちゃんが話を切り出しました。

律「えーと、今日から新入部員が入る。」

「「え！？」」

梓「まさか憂が？」

紬「そうなの憂ちゃん？」

漣「しかしまた何で？」

律「あー。それはな…」

それから十分ぐらいいりっちゃんみんなに説明を始めました。みんな一応は納得してくれたみたいです。

唯「ごめんね、みんな。私のわがままで。」

梓「いえ。でも唯先輩はどうするんですか？」

唯「わ、私は…。」

律「あー。梓と憂ちゃんのツインギターになるから。唯はまだ初心者の憂ちゃんに教える形になるね。まあ、唯は一応ギター弾けるから組み合わせはまた考えればいいさ。」

何をいつたらいいかわからない私にりっちゃんは素早くフォローに入ってくれました。本当にありがたいです。

律「そういうわけで今日からH T Tは六人になる訳だけど皆は大丈夫だよな？」

漣「ああ、よろしく憂ちゃん。」

紬「うふふ、よろしくね、憂ちゃん。」

梓「憂！改めてよろしくね！」

憂「皆さん、これからよろしくお願いします！」

こうして憂も含めた六人での新しいHTTが始まったのです。

～続く～

第十話 新しいHTT（後書き）

感想等お待ちしております。

第十一話　ありがとう（前書き）

おはようございます。紅茶花伝です。
なんか久々な気がしますね（笑）
とくに変わったところは無いと思います。
では本編をどうぞ。

第十一話　ありがとう

冬休みも終わり三学期が始まって早一ヶ月たちました。

唯「どんなに寒くても僕は幸せ」

今日のボーカルは私。いつもの練習風景。

唯「君と僕とで歩きたい手をつないでならいいのにな」

憂は私の隣でギターを弾いています。始めてからまだ二ヶ月位しかたつてないのに憂は凄く上手になりました。コードはすぐに覚えたし私の知らなかった専門用語もよく覚えています…。少し悔しい…。

唯「降る雪止まない気持ちみたいちよっと切ないね」

なにやともあれ憂はすっかり軽音部の一員になりました。にぎやかになったHTTはこれまで以上に楽しいものとなったのは確かです。

唯「明日もいつもの場所に行くよ駆けてくるきみを待つよ」

そうそう。今私が歌っているのはムギちゃんが作曲して漣ちゃんが作詞した新曲の「冬の日」という曲なんだよ！今の季節にぴったりだと思います！

唯「何から話せばいいのかな」「好き」から始めていいかな」

そつえばここ一週間少し言葉が出しにくい感じがする…。寒くな

つてきたから風邪でもひいたのかな……？だけでもうつすぐ練習も終るし頑張ろうと思います。

唯「なんか、うれしいね」

~~~~~

律「いやー。今の演奏いい感じだったねー。」

漣「律がもう少しリズム走りすぎなかったらな。」

律「うわっ！漣ちゃんひどーい！」

漣「酷くない！」

律「あだっ！？」

いつもの漣ちゃんとりっちゃんの漫才じみたやり取りがあります。そういえばどうしてムギちゃんはうつとりしてるんだろう？

梓「憂のギターとっても良かったよ！」

憂「そ、そうかな？」

漣「梓の言う通りだな。初心者とは思えない。」

憂「毎日お姉ちゃんが教えてくれるので……。」

紬「あら！唯ちゃん教え方とても上手なのね！」

唯「憂の呑み込みがはいんだよ！もう私が教えることなくなっちゃったよあ〜。」

「あははは。」

楽しい時間はすぐに過ぎちゃいます。もう下校時刻です……。

律「ありやー。こんな時間かあ。みんな、帰るぞ。」

（帰り道）

今日は和ちゃんも一緒でした。七人で歩くのは周りからみたらとてもかしましく見えると思います。

漣「じゃあ私と律はこの辺で……。」

漣ちゃんがそう切り出す時にふと思ったことがありました。

唯「ちよつと待って！」

律「ん？唯どした？」

和「もう、唯つたら……。いきなり大きな声だしてびっくりしたわよ。」

唯「えへへ、ごめんね。」

梓「唯先輩、どうしたんですか？」

唯「みんなになんかお礼言いたくなっちゃった。」

「「お礼？」」

唯「うん。りっちゃんに、漣ちゃんに、ムギちゃんに、あずにゃんに、和ちゃんに、あと憂も。みんないつもありがと。」

漣「唯、どうしたんだ？」

和「そうね、唯がいきなりお礼なんて。」

律「あはは、照れるな。」

紬「ええ。」

梓「唯先輩もまた急に言いますね…。」

憂「どうしたの、お姉ちゃん？」

唯「うん。言いたくなったからかな？いつも私って迷惑かけてる気がするし…。だからみんなにつて…。」

漣「あははは、唯、私たちは一度も迷惑だっと思って思ったことはないぞ？」

唯「漣ちゃん？」

律「そりゃあ、みんな仲間だからな。」

唯「りっちゃん…。」

紬「そうよ、唯ちゃん。私たちは唯ちゃんが大好きだから。」

唯「ムギちゃん…。」

和「私も幼稚園から一緒だけど貴女がいなければ今の私はいなかったとさえ思えるわよ。」

唯「和ちゃん…。」

梓「私なんか唯先輩のギターに憧れて軽音部に入っただけですよ？迷惑に思っわけないです！むしろ感謝しています！」

唯「あずにゃん…。」

憂「私もね、お姉ちゃんの妹で本当に良かったよ？」

唯「憂…。」

律「だから私達もさ。」

「「ありがとう、唯。」」

唯「みんなあ。グスッ」

律「ほら、泣くな唯。」

紬「笑顔笑顔。はい、ハンカチ。」

唯「ありがとお、ありがとお。」

律「じゃあ私たちは帰るわ。唯、また明日。」

漣「また明日な。」

りっちゃんと漣ちゃんと別れてすぐにムギちゃんも駅に向かって行きました。あずにゃんとも別れ憂は夕飯の準備があるからと先に帰ってしまいました。だから今は和ちゃんと二人っきりで家までの十分の道のりを歩いていきます。

和「ねえ、唯。」

唯「ん？どうしたの和ちゃん？」

和「高校受験のこと覚えてる？」

唯「うん。和ちゃんが勉強見てくれたよね。」

和「夏休み前まで部活も勉強もしてなかった唯が私と一緒に高校に行きたいって言ったのは驚いたわ。」

唯「あ、和ちゃんひどーい。確かにそうだけどさー。」

和「でも、軽音部に入ってから唯は変わったわね。もちろんいい意味だよ？」

唯「そ、そうかな？」

和「唯はね、やれば出来るのよ。それに誰からも好かれる。私も唯の笑顔が好きよ？」

唯「ありがとう、和ちゃん。私も和ちゃんに会えて良かったよ。大好きだよ！」

和「ふふっ。ほら着いたわよ。」

和ちゃんと二人きりの時間はあっという間に過ぎてしまいました。もっとおはなししたかったなあ……。

唯「ありがとう和ちゃん。またね。」

~~~~~

唯「うーいー、ただいまー。」

憂「お帰りなさい！ご飯出来てるよ！」

唯「お、天ぷらだよ！いいですねあ〜。」

憂「今日は上手に揚げられたと思うよ。」

唯「ほんと！？早く食べようよ！」

憂「お姉ちゃん、その前に手を洗わないと…。」

唯「あ、そうだね。」

そのあと憂に洗面所に連れていってもらい手を洗いました。

唯「じゃあ手も洗ったし。」

憂「うん。」

「「いただきます!」」

カチャカチャ

二人で珍しく静かに夕食を食べていると……。

唯「あ、海老が……。」

憂「あ……。」

唯「ごめん憂……。」

憂「ううん。仕方ないよ。ちょっと待っててね。」

箸を使うことも難しくなってきたなあ……。

憂「はい。片付け終わったよ。」

唯「ごめんね、憂……。せっかく憂が作ってくれたのに……。」

憂「私のが一匹残ってるよ、はい。」

そついった憂は自分の海老を箸で二つに切って私のお皿に乗っけてくれました。

唯「あ……。」

憂（ニコッ。）

唯「ありがとうございます。いただきます。」

次は落とさないように気をつけて一口で食べました。

唯「おいひいねえ。」

憂「良かった！作ったかいがあったよ！」

「「えへへ。」」

「風呂場」

唯「いい湯加減だね。」

憂「うん。暖まるよ。」

憂と二人でのお風呂。今ではすっかり日課になりました。中学生のころはよく入ってたんだけどね。湯船の中で私は思いました。中学生のころは私とあまり変わらなかった筈の憂の体のある場所が大きく変化しているのに……。

唯「ねー、うーいー。」

憂「ん？」

唯「最近よく思うんだけど私より胸がおっきくないかな？」

憂「えっ!？」

唯「ほら、やっぱり憂のほうがおおきいよーむう……。」「

憂「お、お姉ちゃん！お願いだから揉まないで！」

唯「はぁーい。」

憂「もう…。」

顔を真っ赤にする憂は可愛かったからよしとしました。さすがにさっきのはやり過ぎたかもしれないけど…。

憂「お姉ちゃんの体は細くて綺麗だねー。」

唯「ほんと？えへへ、ありがとう。」

褒められました。

唯「じゃあそろそろ上がるっか。」

憂「そうだね。」

~~~~~

お風呂に入ったら後は寝るだけです。憂に車椅子ですでに私の寝室になった客間に向かいます。

唯「おやすみ憂。」

憂「うん。おやすみお姉ちゃん。」

最近はこれまでより憂と寝る回数が増えました。憂は暖かいしとっ

てもいい匂いがします。

唯「憂？寝た？」

憂「…。スウスウ…。」

寢息が聞こえます。どうやら憂はもう寝たようです。

唯「ふふ。おやすみ、うい…。」

そう呟き私は隣で寝ている妹の頭を撫でました。今日はいいい日だったと思います。みんなに言葉できちんとお礼をいえたのですから。

唯「明日には風邪直ってもっとちゃんと歌えたらいいなあ……………」

そして私も眠りにつきました。

## 第十一話　ありがとう（後書き）

本編で唯が歌っていた歌は「冬の日」という曲です。一期の番外編でりっちゃんをさんざん苦しめた（？）有名な歌ですね。それではここらで失礼します。紅茶花伝でした。

## 第十二話 進行（前書き）

こんにちわ紅茶花伝です。久しぶりの投稿です。  
ではどうぞ。

## 第十二話 進行

（翌日）

憂（今何時かな…？）

時計を見ようとして起きるとお姉ちゃんはもう起きていました。

憂「おはようお姉ちゃん。今日は早いね。」

挨拶をしてもお姉ちゃんから返事がありません。

憂「お姉ちゃん？」

お姉ちゃんはただ必死に口をパクパクしているだけです。

憂「え…？お姉ちゃんどうしたの……？」

それでも口を動かだけのお姉ちゃん。

唯（声が……、出ない…？）

明らかに様子がおかしいです。

憂「お姉ちゃん、もしかして声が出せないの？」

コクン

お姉ちゃんは頷いて答えます。言葉で思いを伝えられないからでし

よう。お姉ちゃんの目には涙が溜まっていました。

憂「お姉ちゃん、病院に行こう。大丈夫、ただの風邪だよ。ね？」

不安で心が押し潰されそうでしたが私は何とか冷静を装いお姉ちゃんと一緒に病院に行きました。

〽病院〽

「急いで検査をしましょう。」

先生がそうおっしゃってから一時間がたちました。お姉ちゃんの検査の結果を確認しなければなりません。

「平沢唯さん、これからはなすことは貴女にとってつらいことになるでしょう。」

唯<sup>コクン</sup>

憂「え？」

「唯さん、病気の進行がかなり早いです。貴女が話せなくなったのもそのせいです。」

憂「嘘…。嘘ですよ？先生……。」

その言葉はお姉ちゃんはただの風邪で、ただの風邪だから喋れないんだって期待を抱いていた分ショックも大きいものでした。

憂「うぐっ…、えぐっ……。」

もうお姉ちゃんの声が聞けないなんて…。あの甘くて可愛くてそして優しい声を一生聞くことができないなんて……。そう考えると私は自然と涙が溢れてきます。

そっ…

そのとき、お姉ちゃんが手で私の涙を拭ってくれました。そして私を見ていつものように微笑みかけてくれました。

憂「あ、あつ、ごめんなさい。」

「いえ。ですが平沢唯さんには今日から入院していただくことになります。がよろしくでしょうか？」

唯<sup>コクン</sup>

お姉ちゃんは静かに頷きました。そしてお姉ちゃんはまた入院生活を送ることになりました。

く続くく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3217p/>

---

K - ON！～一リットルの涙～

2011年5月21日03時21分発行